

児童福祉施設における性的問題の実態と 対応についての調査

研究代表者

人間環境大学 人間環境学部

坪井 裕子

共同研究者

人間環境大学 人間環境学部

三後 美紀

社会福祉法人 岡崎平和学園

米澤 由実子

児童養護施設プティヴィラージュ

柴田 一匡

1 問題と目的

1-1 はじめに

児童福祉施設における性的問題については、近年、どの施設でも起こりうる問題と認識されつつある。しかし実態があまり明らかにされておらず、対応は各施設に任されており、対応の蓄積が共有されていないなど課題が多い。たとえば、海野ら（2007）によると、ある児童養護施設での性的問題のケアを行った際に、定員 35 名のうち性的な加害も被害もない児童が 2 名のみだったとのことである。しかし、対応については施設ごと、事例ごとに異なり、まとまった統計データが今のところ示されていないのが実情である。施設における性教育の取り組み(徳山ら,2007 ; 河野,2010 など)や、性虐待対応マニュアル(杉山,2008)の配布もなされてきているが、榊原・藤原(2010)によると、性的問題行動への捉え方は個々の職員の判断や力量に依存しやすく、施設全体のコンセンサスが得られた構造化・ルール構築が、依然として課題であるといわれる。性的問題はなかなか明るみに出にくい問題

であり、実態が明らかにされていないため、対応の蓄積が共有されず、施設でのケアを進める上でも課題が多いと言わざるをえない。

特に、児童福祉施設(特に児童養護施設)には、虐待を受けた子どもたちが多く入所するようになり、子どもたちの示すさまざまな問題が指摘されている(坪井, 2005 など)。子どもたちは、対人関係の基礎となる愛着の問題も抱えていることが多いため、親密な他者との関係をうまく築くことができずに、他者と関わる際にストレートな身体的・性的接触になってしまうという恐れがある。

さらに、施設内での性的被害の問題がきちんと対応されないと、被害者がやがて成長して加害にまわる例(山口, 2011)や悪循環(相澤, 2011)も指摘されている。性的問題について考えるにあたっては、まずはその実態を把握することが必要である。施設内での性的問題に正面から取り組み、課題を明らかにして、具体的な対応策をとっていくことは急務であると考えられる。

1-2 本研究の目的

本研究では、施設が抱えている性的問題の実態と、各施設における対応についての実態を明らかにすることを第一の目的とする。また、性的問題に対応する際に、職員自身が性的問題をどのように捉えているのかについて明らかにすることを第二の目的とする。さらに、各施設が独自に行っている性的問題への取り組みを確認(聞き取り調査)することで、どのようなアプローチが有効であるのかを検討することを第三の目的とする。それらを調査・検討することで、施設における性的問題のより良い対応とできれば発生の予防にも寄与したいと考える。

2. 方法

2-1 質問紙調査

【調査 A】児童養護施設における体制と性的問題
協力施設：X 県内の児童養護施設のうち文書によって協力への承諾が得られた 18 施設 29 寮舎。

調査時期：2012 年 5 月から 7 月

調査内容：情緒障害児短期治療施設における性的問題の研究(滝川ら, 2012)を参考に作成した施設の体制や性的問題への取り組みなどを尋ねる 19 項目、過去 3 年間における施設内の性的問題の件数と関与人数、内容、対応など。
分析：各施設の体制についての検討および、施設における性的問題の発生件数・関与人数・性別・年齢・内容・対応等について分析を行った。

【調査 B】児童福祉施設職員の性的問題への意識
調査協力者：協力の得られた X 県内の児童養護施設(以下養護施設) 16 施設、全国の情緒障害児短期治療施設(以下情短) 28 施設に勤務する施設職員 738 人(男性 318 人、女性 417 人、不明 3 人)

調査時期：2012 年 5 月から 10 月

調査内容：デモグラフィック変数(性別、年齢層、職種、経験年数等)と、藤澤・西澤(2006)・滝川ら(2012)を参考とした子どもの年代別の性的問題の意識(26 項目 4 件法)および榊原・藤原(2010)を参考に作成した性的問題に関する職員の意識(27 項目 4 件法)。

分析：性的問題についての意識をたずねた 27 項目に対して因子分析を実施(主因子法, Promax 回転)し、各尺度得点について、施設種別・職種・性別・経験年数などによってどのように意識が異なるのかを検討した。さらに、子どもの年代別にどのような行動を性的問題と捉えるかについても、同様の比較検討を行った。

2-2 聞き取り調査

聞き取り調査：児童養護施設 3 施設の協力を得て聞き取り調査を行った。各施設における性的問題への対応の体制と、施設内でおきた性的問題に関し、発覚の経緯と対応、その後の経過について半構造化面接を行った。

3. 結果と考察

3-1 児童養護施設における施設状況

(1) 項目ごとの回答

【調査 A】で協力が得られた 29 寮舎の内訳は、大舎 10 寮舎、中舎 9 寮舎、小舎(小規模グループホームを含む) 10 寮舎であった。各項目に「はい」「どちらでもない」「いいえ」と答えた割合を図 1 に示す。また、各項目に「はい」と答えると得点が高くなるように点数化し、各施設の状況について平均値を算出した。項目ごとの平均値と標準偏差を表 1 に示す。

全体に平均値が高かったのは「4.男女の居住空間がルールで守られている」、「5.必要に応じて入浴が個別に利用できる」、「14.個別で性教育を実施している」等の項目であった。

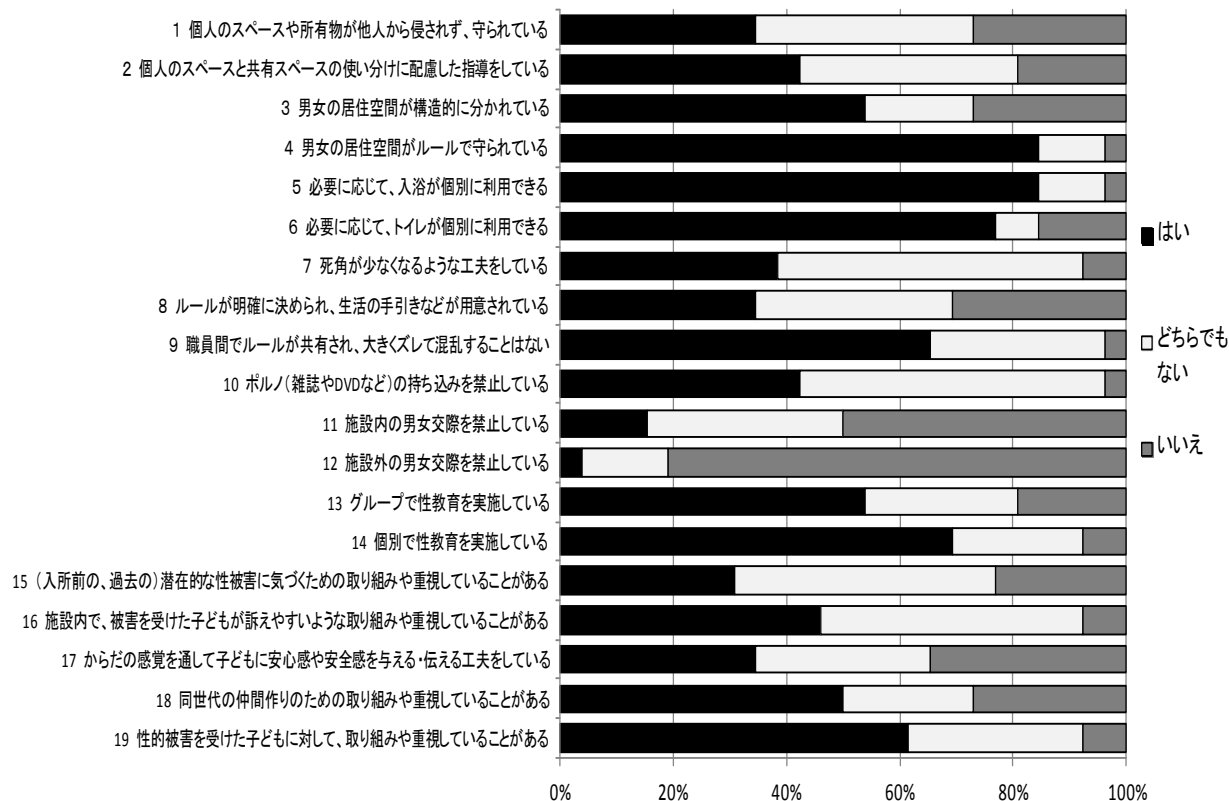


図1 各施設の体制(状況)

表1 各項目の記述統計量(N=29)

項目	項目	平均値	SD
1	個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている	2.10	.772
2	個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている	2.24	.786
3	男女の居住空間が構造的に分かれている	2.21	.902
4	男女の居住空間がルールで守られている	2.76	.577
5	必要に応じて、入浴が個別に利用できる	2.83	.468
6	必要に応じて、トイレが個別に利用できる	2.66	.721
7	死角が少なくなるような工夫をしている	2.24	.636
8	ルールが明確に決められ、生活の手引きなどが用意されている	2.14	.833
9	職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない	2.66	.553
10	ポルノ(雑誌やDVDなど)の持ち込みを禁止している	2.34	.614
11	施設内の男女交際を禁止している	1.66	.721
12	施設外の男女交際を禁止している	1.21	.491
13	グループで性教育を実施している	2.34	.769
14	個別で性教育を実施している	2.55	.632
15	(入所前の、過去の)潜在的な性被害に気づくための取り組みや重視していることがある	2.10	.724
16	施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることがある	2.41	.628
17	からだの感覚を通して子どもに安心感や安全感を与える・伝える工夫をしている	2.07	.842
18	同世代の仲間作りのための取り組みや重視していることがある	2.21	.819
19	性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることがある	2.45	.686

(2) 施設体制(規模)による違い

寮舎の体制(規模)による違いをみるために一
要因分散分析を行った。その結果、「5.必要に応じて入浴が個別に利用できる」のみ、施設体制間の有意差がみられた($F(2,26)=4.73, p<.05$)。多重比較の結果、大舎は中舎および小舎より得点が低かった。大舎においては、施設の構造上の問題などから、入浴などの対応における個別性への配慮が難しい面が示されたといえる。

また、基本的な問題として、「1.個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている」に「はい」と答える施設は全体で40%を切っており、多くの子どもが生活している施設という場における個人のプライバシーの尊重はまだまだ難しい状況にあるといえる。

3-2 児童養護施設での性的問題発生の実態

(1) 性的問題の発生件数

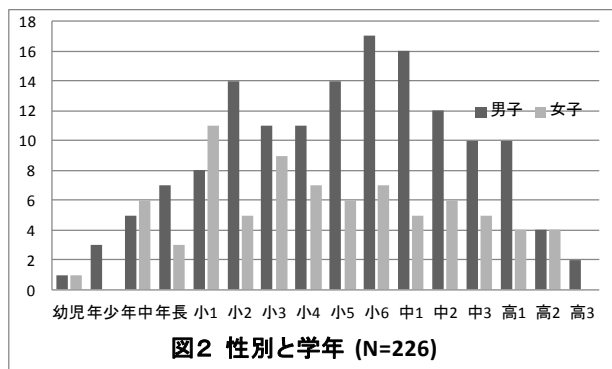
【調査 A】で得られた児童養護施設 18 施設（29 寮舎）での過去 3 年間ににおける性的問題の発生件数は、94 件であった。そのうち 17 施設（94.4%）、20 寮舎（70.0%）で性的問題が起きていることが明らかになった。寮舎別の発生件数を表 2 に示す。

表2 寮舎別問題発生件数				
	寮舎数	問題発生 寮舎数	発生%	平均件数
大舎	10	9	90%	3.10
中舎	9	6	66.70%	4.33
小舎	10	5	50%	2.40
全体	29	20	68.30%	3.24

大舎で 90%、中舎で 66.7%、小舎では 50%の施設で問題が発生している。施設が大きいと子どもの数も多く、発生率も高くなると考えられる。

(2) 問題に関与した子どもの内訳

問題に関与した子どもは 226 人で、男子 145 人（64.2%）、女子 81 人（35.8%）であった。そのうち 26 人（11.5%）が、複数の問題に関与していた。内訳を図 2 に示す。男子は小学 6 年生を最大に、小学 5 年生から中学 2 年生が全体の 4 割、女子は小学 1 年生を最大に、小学 1 年生から小学 3 年生が全体の 3 割であった。



(3) 性的虐待(疑い含む)の有無

関与した子どもの 47 人（20.8%）に性的被虐待経験があった。ただし、施設が把握している数であり、性的虐待の疑いのケースも含んでいる。

(4) 問題の内容

全 94 件の性的問題の内訳は、性的接触 49 件（52.0%）、性行為 10 件（11.0%）、性的非接触 9 件（9.0%）、性的刺激 1 件（1.0%）、その他 25 件（27.0%）であった（図 3）。問題の内容を寮舎ごとに示したものが表 3 である。件数は中舎が最も多く、次に大舎、小舎の順であった。大舎・中舎では、性的接触（性器やプライベートゾーンへの接触）が最も多く、小舎では「その他」が多かった。

さらに問題の内容別に子どもの年齢・性別の人数（重複あり）を示したものが表 4 である。性行為は高学年（特に中 3 から高 2）が関与人数の半数以上（10 人）と多かった。性的接触に関与している年代は幅広いが、男子（84 人）の方が女子（39 人）より多かった。性的非接触（性器やプライベートゾーンを見せたり見せられたりすること）は幼児から小学生年代が中心で、男子同士が 24 件あった。中高生の関与はなかった。性的刺激（ポルノ等への暴露）は、小 6 男子のみが関与していた。「その他」（のぞきや下着盗など）は、さまざまな年代にみられたが、やはり男子が多かった。

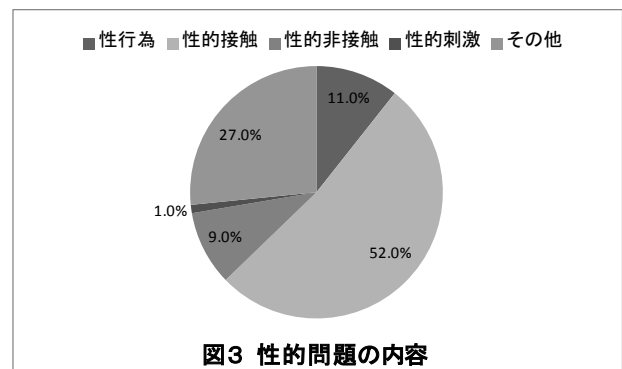


表3 寮舎別問題内容内訳						
	性行為	性的接触	性的非接触	性的刺激	その他	計
大舎	4	20	2	0	5	31
中舎	3	23	2	1	10	39
小舎	3	6	5	0	10	24
計	10	49	9	1	25	94

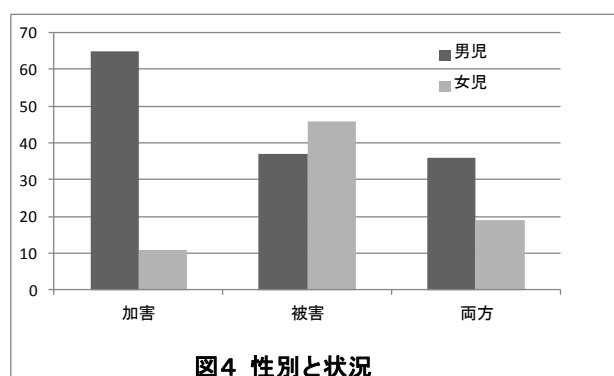
件

表4 年齢別・性別・問題別の人数																		
		3歳	4歳	5歳	6歳	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3	実習生
性行為	男							3				1		3	2	2		11
	女						1	1			1	0		2	2	1		8
性的接触	男	1	3	5	3	4	5	7	10	10	5	10	6	7	4	2	2	0
	女	1		3	1	6	4	6	2	4	5	2	3	1	1	0	0	84
非接触	男			1	4	4	6			1	1							39
	女			1	1	4	1	1	1									17
性的刺激	男										3							10
	女										0							3
その他	男					3	7	1	1	4	7	5	6	0	5	1		40
	女			2	1	2	0	2	4	2	0	3	4	2	1	3		28
計	男	1	3	6	7	11	18	11	11	15	16	16	12	10	11	5	2	155
	女	1		6	3	12	6	10	7	6	6	5	7	5	4	4	0	85

人

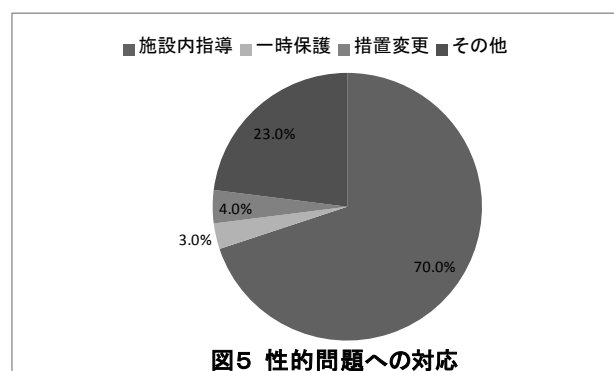
(5) 加害・被害人数

加害・被害の人数を性別に示す(図4)。加害児が76人(33.6%),被害児が83人(36.7%),加害・被害両方の立場の児が55人(24.3%)であった。 χ^2 検定を行い,残差分析をしたところ,男児が加害者,女児が被害者になることが有意に示された($\chi^2=29.07$, $df=2$, $p<.001$)。また,加害・被害両方の立場の子どもについて詳細を検討したところ,被害者が加害者に転じた性的問題もあった。このように被害を受けた者が加害に転じる等,子どもが加害・被害どちらの立場にもなりうることも明らかとなり,施設における性的問題は連鎖しやすいことが示唆された。



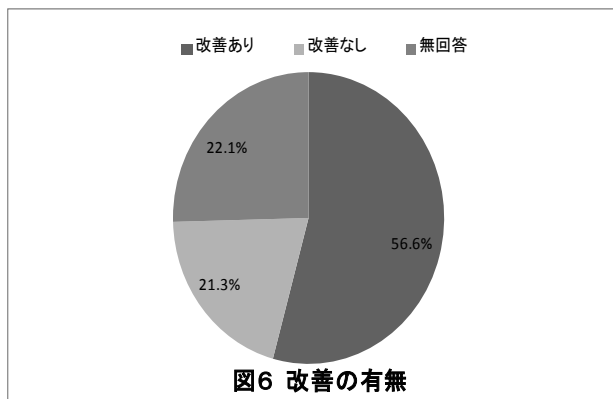
(6) 対応

施設内指導が158人(70.0%)であり,一時保護・措置変更は合わせて16人(7.0%)のみであった(図5)。その他52人(23.0%:他の対応と重複あり)には,家庭引き取り,児童福祉司・児童心理司との面接,入院治療等が含まれた。



(7) 改善の有無

性的問題への対応後の様子について尋ねたところ,128人(56.6%)の子どもに何かしらの改善がみられたとの報告が得られた(図6)。一方で,48人(21.3%)は改善なし,残りは無回答であった。



(8) 考察

児童養護施設ごとに性的問題の件数や内容に相違はあったが、9割以上の児童養護施設において性的問題が生じており、どの施設でも起こりうる問題であることが明らかとなった。特に、1舎あたりの定員の多い大舎の施設の方が、問題の発生率が高く、施設の構造上の問題も絡んでいることが推察された。

性的問題には、幼児から高校生までの子どもが関わっていた。男子の関与が半数以上を占めており、特に、性的興味・関心が高まる思春期に性加害を起こしやすいことが明らかとなった。一方で、女子は、性的な知識があいまいな小学校低学年に被害にあいやすい傾向が示された。低学年の頃から予防的な教育を行い、性別や学年に応じた知識と対処力を身につけさせていく必要があるといえるだろう。

性的問題は、自室や風呂場、トイレ等、職員が目が届きにくい場所で起きやすいといった特徴が見られた。やはり児童養護施設における構造上の問題が浮き彫りになったといえる。従って、施設の構造の見直しや確認が、性的問題の発生の一予防につながると考える。滝川ら(2012)は、物理的な環境設定や大人の目が届く環境設定の重要性を挙げ、所有物についても「自分の所有物が大切に守られることは、自分が大切に守られる感覚と密

接に関係し、他者からの侵襲的な行為の防止につながる」と述べている。集団生活の中での個人スペースの確保、個人の所有物を守る工夫、死角を少なくする等、環境上の配慮が性的問題の予防に意味を持つといえよう。

3-3 子どもの年代別に見た児童福祉施設職員の性的問題の捉えかた

(1) 「子どもの年代別の性的問題の意識」尺度の検討

【調査B】で得られた児童福祉施設（養護施設16・情短施設28）の職員738人を対象に、子どもの行動に対して性的問題ととらえるかどうかを子どもの年代別にたずねた26項目について、因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。

その結果、因子構造として、幼児に対しては「対人的身体接触行動」「性化傾向行動」の2因子構造、小学校低学年の児童に対しても「対人的身体接触行動」「性化傾向行動」の2因子構造と同様の因子構造が認められた。小学校高学年の児童に対しては「性化傾向行動」「対人的身体接触行動」「物理的閉鎖状況での行動」の3因子構造、中学生に対しても「性化傾向行動」「対人的身体接触行動」「物理的閉鎖状況での行動」の3因子構造であると推測された。

職員が子どもの行動をとらえる際に、幼児と小学校低学年の児童、小学校高学年の児童と中学生について、それぞれ類似した問題把握の仕方をしていることが明らかとなった。

(2) 施設種別による子どもの行動のとらえ方の比較

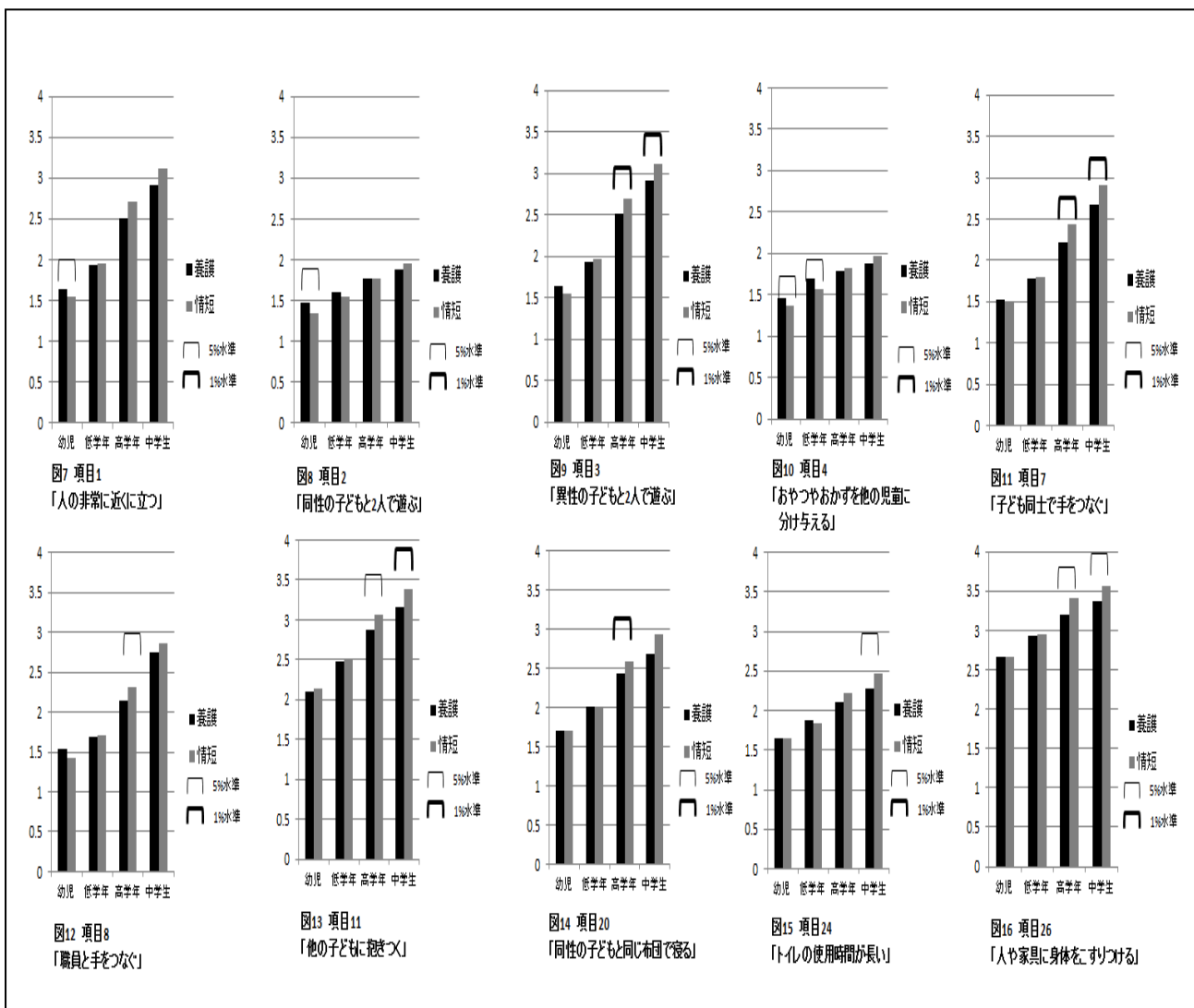
「子どもの年代別の性的問題の意識」尺度は子どもの年代によって因子構造が異なることが明らかとなったため、項目ごとの得点の比較を行うこととした。各項目について、施設種別（養護施設・

情短)×子どもの年代(幼児・小学校低学年・小学校高学年・中学生)の分散分析(混合計画)を行った。その結果、すべての項目において子どもの年代の主効果がみられた(幼児<低学年<高学年<中学生)。また、交互作用が見られた項目は10項目、施設種別の主効果のみが見られた項目は9項目であった(養護<情短)。交互作用がみられた項目についてはそれぞれ単純主効果の検定を行った。結果を図7から図16に示す。

また、施設種別と子どもの年代を組み合わせた各群の平均値についてみていくと、施設種別によらずどの年代の子どもにおいても明らかに性的な

問題であるにとらえられている行動は、「25.人前で性的部位を触る」など3項目であった(図17)。

さらに、施設種別によらずどの年代においても性的問題にとらえる得点が低い行動は、「2.同性の子どもと遊ぶ」など6項目であった(図18)。他にも、「18.異性の子どもと入浴する」など幼児では問題としてとらえないが低学年以上は問題としてとらえる行動が3項目(図19)、「1.人の非常に近くに立つ」など高学年以上では問題としてとらえられる行動が12項目(図20)、「8.職員と手をつなぐ」など中学生以上では問題としてとらえられる行動は2項目(図21)が示された。



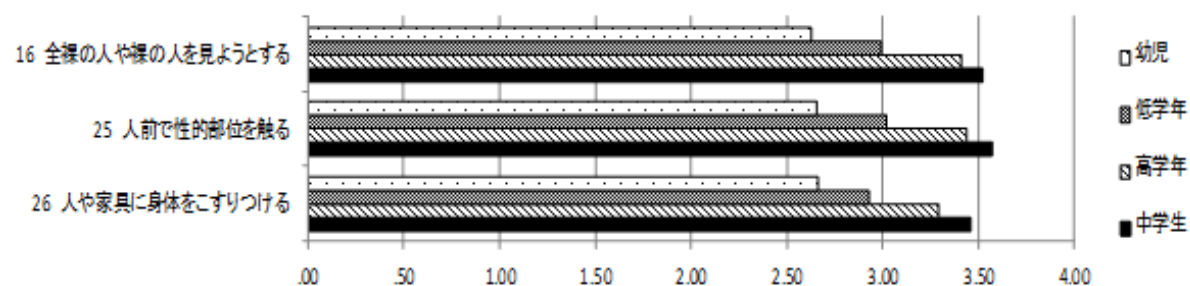


図17 どの年代でも性的問題ととらえられる項目

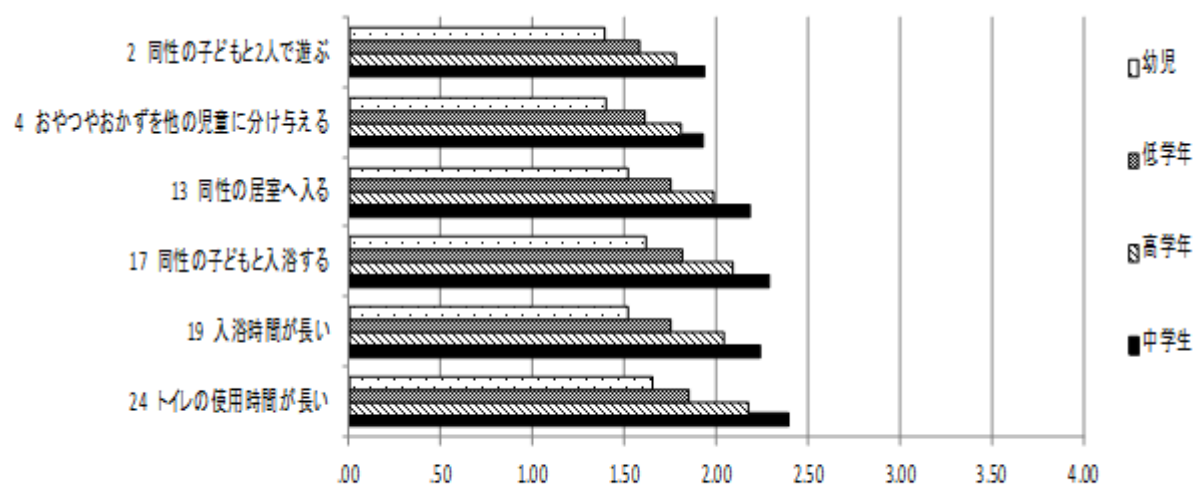


図18 どの年代でも性的問題ととらえる得点が低い項目

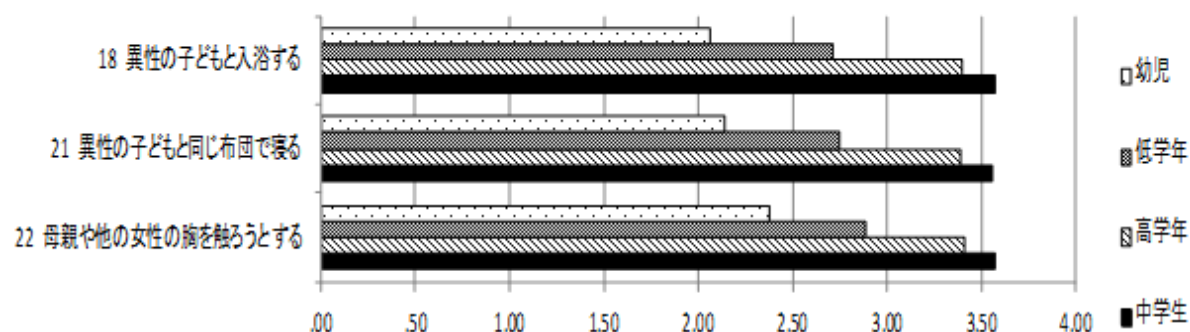


図19 小学校低学年以上で性的問題ととらえられる項目

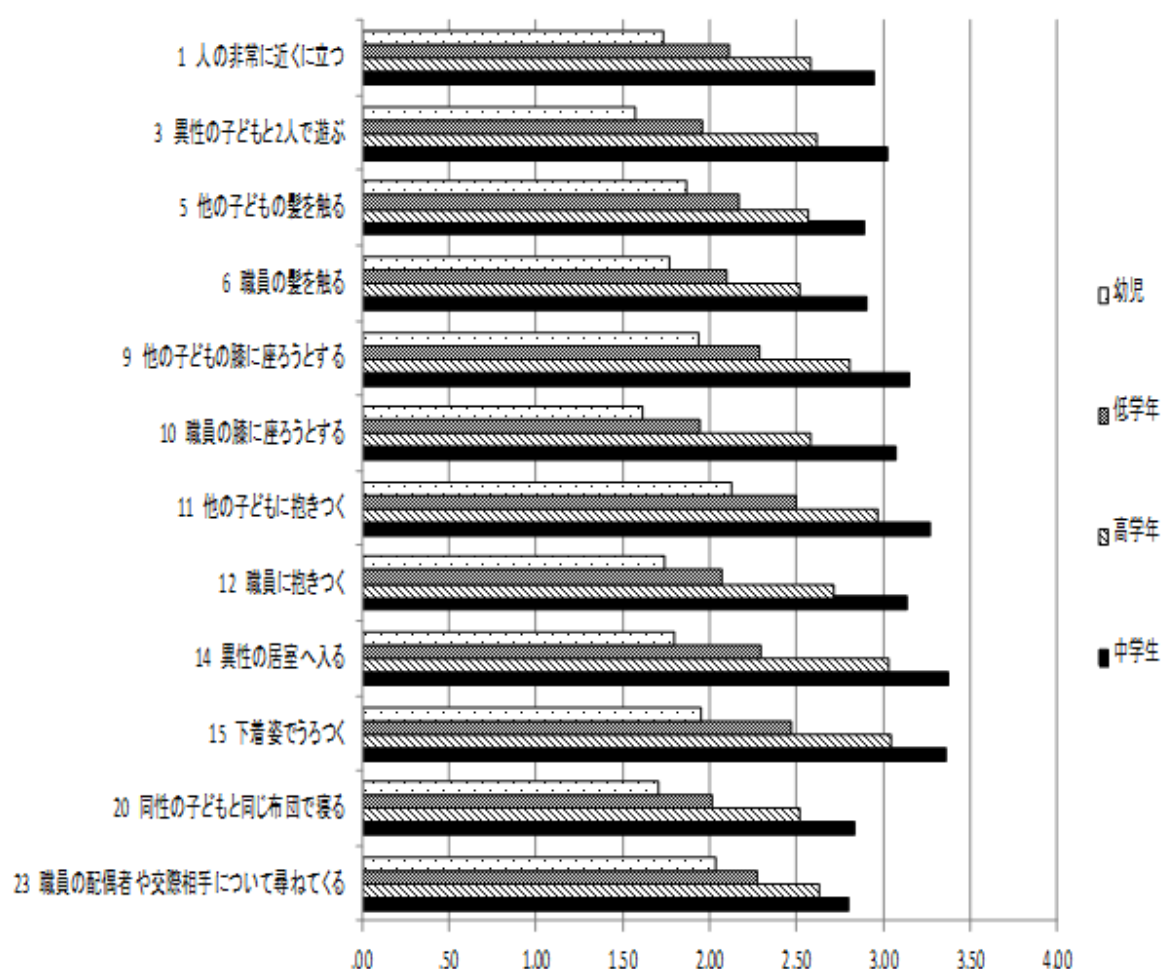


図20 小学校高学年以上で性的問題ととらえられる項目

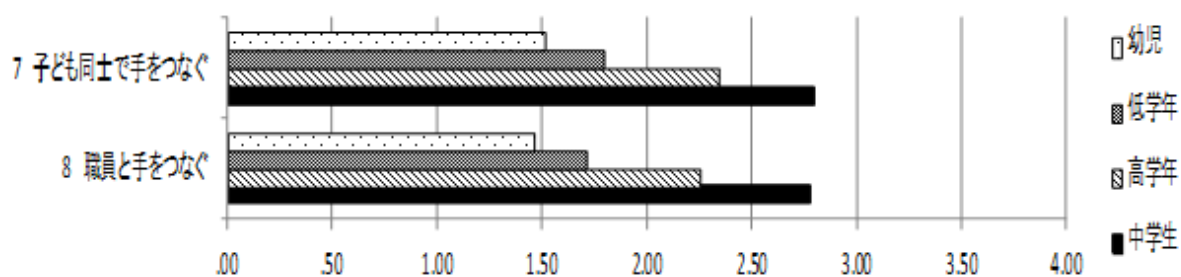


図21 中学生以上で性的問題ととらえられる項目

分散分析結果（表 5）から子どもの年代や施設による特徴がみられた行動について以下に述べる。

「15.下着姿でうろつく」「16.全裸の人や裸の人を見ようとする」などの 9 項目は、ほとんどの年代の子どもに対して問題としてとらえている上に、情短職員が養護施設職員よりも問題としてとらえていることが明らかとなった。一方、子どもの年代により施設種別でとらえ方が異なる行動もあり、「3. 異性の子どもと 2 人で遊ぶ」「11.他の子どもに抱きつく」などの 4 項目（図 9, 11, 13, 16）は高学年以上において、「20.同性の子どもと同じ布団で寝る」などの 2 項目（図 14, 15）は中学生において、いずれも情短職員が養護施設職員よりも問題としてとらえていることが示された。

表5 子の年代別行動に対する性的問題としての意識の違い(平均点と標準偏差)

番号	項目	養護施設				情短				F値		
		幼児	低学年	高学年	中学生	幼児	低学年	高学年	中学生	年代の主効果	種別的主効果	交互作用
1	人の非常に近くに立つ	1.82 (0.89)	2.13 (0.87)	2.52 (0.86)	2.87 (0.95)	1.69 (0.81)	2.09 (0.80)	2.62 (0.78)	2.99 (0.84)	407.32 ***	0.24	5.54 **
2	同性の子どもと2人で遊ぶ	1.48 (0.81)	1.61 (0.81)	1.76 (0.81)	1.88 (0.87)	1.34 (0.67)	1.54 (0.74)	1.77 (0.76)	1.85 (0.79)	141.55 ***	0.37	6.53 **
3	異性の子どもと2人で遊ぶ	1.63 (0.80)	1.93 (0.79)	2.51 (0.82)	2.91 (0.96)	1.54 (0.73)	1.96 (0.77)	2.70 (0.76)	3.12 (0.85)	602.61 ***	3.65	7.60 **
4	おやつやおかずを他の児童に分け与える	1.46 (0.75)	1.69 (0.78)	1.79 (0.80)	1.87 (0.80)	1.36 (0.58)	1.56 (0.67)	1.83 (0.76)	1.96 (0.79)	152.28 ***	0.29	8.36 ***
5	他の子どもの髪を触る	1.85 (0.85)	2.16 (0.80)	2.52 (0.86)	2.82 (0.95)	1.88 (0.79)	2.17 (0.78)	2.63 (0.81)	2.97 (0.87)	365.32 ***	2.06	1.99
6	職員の髪を触る	1.73 (0.80)	2.03 (0.81)	2.43 (0.87)	2.83 (1.02)	1.78 (0.78)	2.12 (0.82)	2.62 (0.86)	2.97 (0.92)	392.13 ***	4.92 *	1.37
7	子ども同士で手をつなぐ	1.53 (0.77)	1.78 (0.79)	2.21 (0.84)	2.68 (1.00)	1.50 (0.72)	1.80 (0.69)	2.44 (0.79)	2.91 (0.87)	442.63 ***	5.99 *	6.44 **
8	職員と手をつなぐ	1.53 (0.81)	1.69 (0.82)	2.14 (0.86)	2.74 (1.06)	1.43 (0.78)	1.71 (0.74)	2.32 (0.82)	2.86 (0.88)	384.34 ***	1.67	4.02 *
9	他の子どもの膝に座ろうとする	1.91 (0.83)	2.27 (0.91)	2.71 (0.93)	3.09 (0.98)	1.95 (0.82)	2.30 (0.82)	2.89 (0.82)	3.23 (0.86)	480.72 ***	3.05	2.15
10	職員の膝に座ろうとする	1.65 (0.99)	1.91 (0.84)	2.49 (0.89)	3.03 (1.06)	1.59 (0.82)	1.95 (0.82)	2.67 (0.83)	3.15 (0.87)	464.87 ***	2.05	3.11
11	他の子どもに抱きつく	2.10 (0.85)	2.48 (0.87)	2.88 (0.91)	3.16 (0.97)	2.14 (0.83)	2.50 (0.78)	3.06 (0.81)	3.38 (0.80)	432.12 ***	4.34 *	4.11 *
12	職員に抱きつく	1.77 (0.93)	2.01 (0.87)	2.61 (0.91)	3.07 (1.04)	1.73 (0.86)	2.09 (0.83)	2.79 (0.83)	3.22 (0.85)	444.94 ***	3.39	2.58
13	同性の居室へ入る	1.49 (0.74)	1.75 (0.87)	1.96 (0.93)	2.14 (0.99)	1.53 (0.78)	1.74 (0.79)	2.01 (0.82)	2.20 (0.86)	185.23 ***	0.34	0.66
14	異性の居室へ入る	1.68 (0.83)	2.16 (0.90)	2.90 (0.96)	3.26 (0.97)	1.86 (0.85)	2.38 (0.85)	3.15 (0.84)	3.48 (0.84)	681.57 ***	16.83 ***	0.30
15	下着姿でうろつく	1.93 (0.88)	2.40 (0.96)	2.97 (1.00)	3.26 (0.97)	1.96 (0.87)	2.52 (0.86)	3.15 (0.88)	3.47 (0.84)	585.66 ***	5.72 *	2.41
16	全裸の人や裸の人を見ようとする	2.59 (0.96)	2.94 (0.94)	3.36 (0.97)	3.43 (0.99)	2.65 (0.92)	3.04 (0.79)	3.50 (0.75)	3.64 (0.75)	331.98 ***	4.83 *	1.63
17	同性の子どもと入浴する	1.73 (0.98)	1.89 (0.96)	2.13 (0.99)	2.34 (1.06)	1.55 (0.79)	1.76 (0.81)	2.09 (0.88)	2.29 (0.94)	180.59 ***	2.52	2.16
18	異性の子どもと入浴する	1.99 (0.99)	2.68 (1.08)	3.35 (1.07)	3.46 (1.09)	2.12 (0.93)	2.76 (0.96)	3.48 (0.86)	3.69 (0.81)	609.49 ***	5.56 *	1.24
19	入浴時間が長い	1.54 (0.69)	1.79 (0.77)	2.10 (0.81)	2.20 (0.88)	1.50 (0.63)	1.73 (0.70)	2.03 (0.77)	2.26 (0.84)	249.04 ***	0.28	2.31
20	同性の子どもと同じ布団で寝る	1.70 (0.88)	2.01 (0.95)	2.43 (1.03)	2.69 (1.11)	1.71 (0.83)	2.01 (0.87)	2.58 (0.96)	2.94 (0.99)	360.52 ***	2.80	5.43 **
21	異性の子どもと同じ布団で寝る	2.10 (1.03)	2.69 (1.09)	3.31 (1.05)	3.43 (1.08)	2.17 (0.95)	2.80 (0.93)	3.49 (0.85)	3.68 (0.80)	626.69 ***	6.02 *	2.39
22	母親や他の女性の胸を触ろうとする	2.30 (0.92)	2.81 (0.96)	3.33 (1.03)	3.47 (1.03)	2.43 (0.89)	2.95 (0.85)	3.51 (0.80)	3.68 (0.77)	443.03 ***	8.68 **	0.52
23	職員の配偶者や交際相手について尋ねてくる	1.89 (0.85)	2.21 (0.86)	2.58 (0.90)	2.70 (0.95)	2.11 (0.86)	2.32 (0.84)	2.68 (0.86)	2.87 (0.88)	268.33 ***	6.27 *	1.52
24	トイレの使用時間が長い	1.65 (0.74)	1.88 (0.80)	2.11 (0.83)	2.27 (0.97)	1.65 (0.68)	1.83 (0.72)	2.22 (0.83)	2.46 (0.92)	222.99 ***	1.28	6.02 **
25	人前で性的部位を触る	2.60 (0.93)	3.00 (0.96)	3.35 (1.03)	3.47 (1.07)	2.69 (0.92)	3.06 (0.85)	3.53 (0.77)	3.68 (0.75)	341.68 ***	4.69 *	2.48
26	人や家具に身体をこすりつける	2.67 (1.02)	2.93 (1.05)	3.20 (1.10)	3.38 (1.12)	2.66 (0.91)	2.95 (0.92)	3.40 (0.86)	3.57 (0.83)	283.46 ***	2.20	6.23 **

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

(3) 考察

子どもの年代が高くなるにつれて、ほぼすべての行動について職員が性的問題としてとらえていることが明らかとなった。また、情短職員が特に問題意識を持ってとらえている行動があることも示された。さらに、小学校高学年以上の子どもにおける異性の子どもとの関わりや子ども同士の身体接触については、情短職員が養護施設職員よりも問題としてとらえていることが明らかとなった。

これらの背景には接する子どもの年齢層が異なることや、施設の視点の違いがあると推測される。今後は、それぞれの視点やとらえ方の特徴について職員同士が認識したうえで施設の性的問題に対応していくことの有用性を検討する必要がある。

3-4 施設職員の子どもの性的問題への意識

(1) 「性的問題に関する職員の意識」尺度の検討

【調査 B】で職員の性的問題についての意識を測定するために用いた 27 項目に対し、因子分析（主因子法・Promax 回転）を行った。その結果、固有値の推移（5.416, 2.923, 1.494, 1.394, 1.354, 1.207, 1.097, 0.971・・・）と解釈可能性から 5 因子構造であることが推測された。そこで因子数を 5 因子と指定し、再度因子分析を行った。因子負荷量の低い項目を削除し、因子分析を繰り返した最終的な因子パターンを表 6 に示す。

第 1 因子は、「性に関する指導方法がわからない」「どのような性的問題から児童相談所に連絡するのかわからない」など、指導や方針に関する悩みについての項目が高い負荷量を示していたことから「指導方法の悩み」因子と名付けられた。

第 2 因子は、「力関係を示すために性を利用する子がいる」「性的問題と暴力（力による支配）との関連を感じる」など、性的問題と子どもとの対人関係の関連への意識を示す項目が高い負荷量を示していたことから「対人関係との関連」因子と名付

けられた。

第 3 因子は、「発達障害がある児童への説明が難しい」「知的に低い児童への説明が難しい」という項目からなっており、「障がいへの対応」因子と名付けられた。

第 4 因子は、「男児に女性職員が指導するのは難しい」「女児に男性職員が指導するのは難しい」という項目からなっており、「異性の子どもへの対応」因子と名付けられた。

第 5 因子は、「性的問題は発見しにくい」「（建物の）構造上に問題があると思う」など、問題の発見の難しさを示す項目が高い負荷量を示していたため、「問題の見えにくさ」因子と名付けられた。

各因子名を尺度名とし、平均値と標準偏差を算出した。内的整合性を検討するためクロンバックの α 係数を算出した。「指導方法の悩み」尺度は平均値 2.78 ($SD0.51$), $\alpha=.77$ (7 項目), 「対人関係との関連」尺度は平均値 3.14 ($SD0.56$), $\alpha=.75$ (5 項目), 「障がいへの対応」尺度は平均値 3.35 ($SD0.68$), $\alpha=.83$ (2 項目), 「異性の子どもへの対応」尺度は平均値 3.02 ($SD0.79$), $\alpha=.90$ (2 項目), 「問題の見えにくさ」尺度は平均値 3.32 ($SD0.50$), $\alpha=.56$ (3 項目) であった。「問題の見えにくさ」の内的整合性は低い、項目数が少ないためやむをえないと考え使用することとした。

(2) 施設別・性別にみた性的問題への意識

性的問題についての意識の各下位尺度を従属変数に、施設種別（養護施設、情短）と性別（男性、女性）を独立変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果を表 7 に示す。「指導方法の悩み」因子において施設種別と性別の交互作用がみられた ($F(1,684) = 5.22, p < .05$)。そこで単純主効果の検定を行ったところ、養護施設において性別の主効果が有意であった ($F(1,684) = 11.05, p < .01$)。このように養護施設では女性が男性よりも「指導方法

の悩み」の得点が有意に高いことが示された。また、「対人関係との関連」では種別の主効果がみられ ($F(1,674) = 33.37, p < .001$)、情短の得点が養護施設より有意に高いことが示された。「異性の子どもへの対応」では性別の主効果がみられ ($F(1,700) = 15.48, p < .001$)、女性の方が男性より有意に得点が高いことが示された。つまり女性の方が異性の子どもへの対応に苦慮しているという結果が示された。「障がいへの対応」と「問題の見えにくさ」においては有意差がみられなかった。

(3) 経験年数別にみた性的問題への意識

次に、施設種別と経験年数（「5年以下」、「6年から10年」、「11年以上」）を独立変数とした2要因分散分析を行った（表8）。その結果、「指導方法の悩み」において経験年数の主効果がみられた ($F(1,648) = 6.67, p < .01$)。

多重比較の結果、「5年以下」は「6年から10年」と「11年以上」に比較して有意に高かった（それぞれ $p < .05$ ）。また、「対人関係との関連」においては施設種別の主効果 ($F(1,638) = 30.50, p < .001$) と経験年数の主効果 ($F(1,638) = 5.71, p < .01$) がみられた。施設種別では情短が養護施設よりも高く、経験年数での多重比較の結果からは「5年以下」が「6年から10年」よりも有意に低い ($p < .05$) という結果が得られた。

さらに「問題の見えにくさ」においては、施設種別の主効果 ($F(1,660) = 4.59, p < .05$) と経験年数の主効果 ($F(1,660) = 13.22, p < .001$) がみられた。施設種別では情短が養護施設よりも得点が高く、経験年数での多重比較を行ったところ「5年以下」は「6年から10年」と「11年以上」に比較して有意に低い（それぞれ $p < .001$ ）ことが示された。

表6 性的問題への意識の因子分析結果(主因子法 Promax回転)						
	項目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子 指導方法の悩み						
11	性に関する指導方法がわからない	.658	-.074	-.025	.084	.049
14	どのような性的問題から児童相談所に連絡するのかわからない	.654	.006	.010	-.079	-.153
18	甘えなのか性的な接触なのか判別するのが難しい	.536	.033	.111	-.069	.069
6	年齢相応の性的関心と性的問題の境界がわかりにくい	.526	-.022	.017	-.005	.028
12	異性の職員と性的問題についてオープンに話しにくい	.516	-.055	-.061	.082	-.067
13	職員間で性的問題についての指導方法が統一されていない	.496	.135	-.087	-.070	.004
10	子どもに性的指導が伝わっているのかわからない	.459	.055	.047	.098	.122
第2因子 対人関係との関連						
24	力関係を示すために性を利用する子がいる	-.072	.777	-.048	.062	-.048
23	性的問題と暴力(力による支配)との関連を感じる	.015	.769	-.006	-.009	-.099
22	性的問題と対象関係の持ち方は関連があると思う	.026	.602	.036	-.001	-.019
19	相手の関心を引くために性を利用する子がいる	.094	.538	-.020	-.023	.128
21	身体接触を愛情表現と勘違いしている児童がいる	.016	.460	.091	-.014	.079
第3因子 障がいへの対応						
17	発達障害がある児童への説明が難しい	-.009	-.010	.922	-.010	.028
16	知的に低い児童への説明が難しい	-.005	.030	.880	.024	-.038
第4因子 異性の子どもへの対応						
8	男児に女性職員が指導するのは難しい	.001	-.025	-.021	.886	.027
9	女児に男性職員が指導するのは難しい	-.005	.044	.035	.815	-.045
第5因子 問題の見えにくさ						
2	性的問題は発見しにくい	-.019	-.058	-.027	.011	.710
1	(建物の)構造上に問題があると思う	-.098	.216	-.035	-.014	.470
3	子どもをずっと見張ってられないと思う	.050	-.033	.042	-.028	.445
	因子間相関	—	.079	.529	.399	.325
			—	.237	.135	.394
				—	.236	.417
					—	.274

表7 施設種別と性別でみた各尺度の平均値と標準偏差および分散分析の結果

	児童養護施設				情緒障害児短期治療施設				主効果(F値)		交互作用(F値)
	男性		女性		男性		女性		施設種別	性別	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
指導方法の悩み	2.65	0.50	2.87	0.49	2.75	0.50	2.79	0.53	0.02	9.92 **	5.22 *
対人関係との関連	2.96	0.61	2.99	0.56	3.19	0.54	3.27	0.51	33.37 ***	1.48	0.31
障がいへの対応	3.30	0.74	3.40	0.65	3.32	0.68	3.34	0.68	0.12	1.22	0.63
異性の子どもへの対応	2.77	0.83	3.10	0.78	2.95	0.73	3.12	0.80	2.50	15.48 ***	1.39
問題の見えにくさ	3.29	0.49	3.29	0.49	3.35	0.54	3.31	0.48	1.04	0.24	0.21

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表8 施設種別と経験年数でみた各尺度の平均値と標準偏差および分散分析の結果

	児童養護施設						情緒障害児短期治療施設						主効果(F値)		交互作用(F値)
	5年以下		6～10年		11年以上		5年以下		6～10年		11年以上		施設種別	経験年数	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
指導方法の悩み	2.87	0.44	2.66	0.52	2.66	0.62	2.80	0.51	2.71	0.58	2.68	0.40	0.00	6.67 **	0.87
対人関係との関連	2.93	0.58	3.09	0.56	2.99	0.60	3.16	0.54	3.33	0.46	3.38	0.51	30.50 ***	5.71 **	0.87
障がいへの対応	3.35	0.69	3.28	0.66	3.42	0.74	3.32	0.67	3.30	0.72	3.43	0.68	0.00	1.07	0.10
異性の子どもへの対応	3.02	0.81	2.87	0.84	3.08	0.76	3.07	0.76	2.95	0.78	3.09	0.80	0.39	1.96	0.05
問題の見えにくさ	3.22	0.48	3.38	0.45	3.35	0.51	3.23	0.53	3.48	0.42	3.53	0.41	4.59 *	13.22 ***	1.35

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

表9 施設種別と職種でみた各尺度の平均値と標準偏差および分散分析の結果

	児童養護施設										情緒障害児短期治療施設										主効果(F値)		交互作用(F値)
	指導員		保育士		心理職		FSW		その他		指導員		保育士		心理職		FSW		その他		施設種別	職種	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
指導方法の悩み	2.75	0.46	2.82	0.50	2.92	0.41	2.89	0.68	2.70	0.64	2.79	0.51	2.91	0.53	2.68	0.51	2.99	0.33	2.71	0.51	0.00	1.67	1.11
対人関係との関連	3.01	0.54	2.90	0.61	3.23	0.50	3.28	0.56	2.87	0.57	3.17	0.50	3.14	0.51	3.41	0.44	3.64	0.41	3.13	0.65	12.99 ***	5.54 ***	0.31
障がいへの対応	3.29	0.70	3.39	0.70	3.50	0.54	3.61	0.49	3.33	0.76	3.29	0.69	3.57	0.57	3.36	0.65	3.41	0.63	3.22	0.74	0.04	2.54 *	1.01
異性の子どもへの対応	3.00	0.80	2.99	0.83	2.83	0.67	3.00	0.90	2.94	0.89	3.05	0.75	3.13	0.84	3.06	0.78	3.25	0.64	2.89	0.80	1.59	0.66	0.36
問題の見えにくさ	3.31	0.43	3.26	0.53	3.31	0.41	3.67	0.29	3.14	0.56	3.32	0.47	3.37	0.48	3.43	0.49	3.45	0.43	3.15	0.60	0.02	3.49 **	0.65

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

(4) 職種別にみた性的問題への意識

性的問題における職員意識の各下位尺度得点を従属変数に、施設種別（養護と情短）と職種（指導員、保育士、心理職、FSW、その他）を独立変数とした2要因分散分析を行った（表9）。

「対人関係との関連」では、施設種別の主効果（ $F(1,668)=12.99, p<.001$ ）と職種の主効果（ $F(1,668)=5.54, p<.001$ ）がみられた。施設種別では情短が養護施設よりも高く、職種での多重比較の結果、指導員・保育士・その他よりも、心理職とFSWが有意に高かった。指導員・保育士・その他と心理職の間はそれぞれ $p<.001$ 、指導員・その他とFSWの間はそれぞれ $p<.05$ 、保育士とFSWの間は $p<.01$ であった。

また、「障がいへの対応」においては職種の主効果がみられ（ $F(1,692)=2.54, p<.05$ ）、保育士の得点が指導員よりも有意に高いことが示された（ $p<.05$ ）。「問題の見えにくさ」においては、職種の主効果（ $F(1,691)=3.49, p<.01$ ）がみられ、多重比較の結果、指導員・保育士・心理職・FSWがそれぞれ、その他よりも有意に高かった。指導員・保育士とその他の間は $p<.05$ 、心理職とその他の間は $p<.001$ 、FSWとその他の間は $p<.01$ であった。

(5) 考察

児童福祉施設職員の性的問題への意識について検討したところ、施設種別・性別・経験年数・職種によってさまざまな違いのあることが示された。

経験年数5年以下の職員は性的問題の指導に困難さを感じていることが示された。また、性的問題の背景に対人関係に関わる問題を想定することや、性的問題そのものの捉えにくさを意識することが、経験6年以上の職員に比べて少ないということが明らかとなった。一方、心理職やFSWは対人関係の問題に目を向けるなど他の職種と異なる意識を持つことが示された。施設内で各職種が

それぞれの専門性の違いを意識しつつ、共通の認識が持てるようにしていく必要があるといえる。

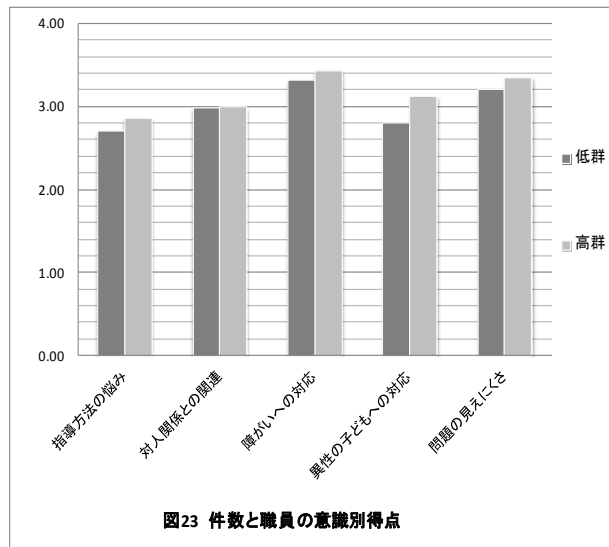
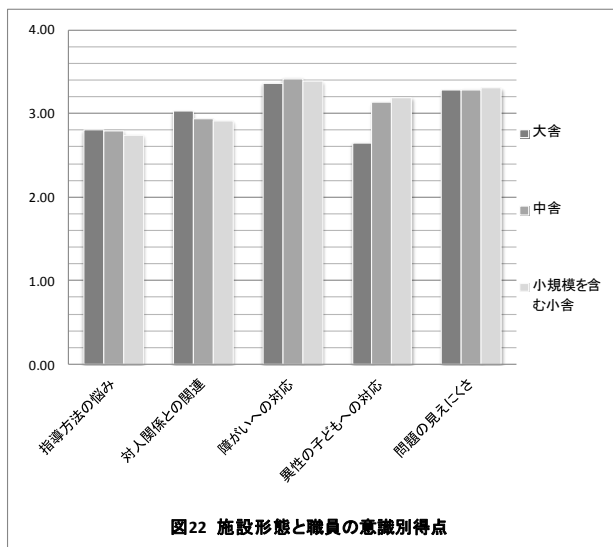
さらに、情緒障害児短期治療施設の職員は児童養護施設の職員よりも、性的問題の背景にある対人関係への意識が高いことが明らかとなった。これらのことから、児童福祉施設での職員の経験に応じたサポート体制の充実、心理職やFSWの活用、施設種別の特徴に応じた研修のあり方について検討する有用性が示唆されたといえる。

3-5 児童養護施設における性的問題についての職員の意識

(1) 施設状況と職員意識

本項では、X県内の児童養護施設18施設の内、【調査A】および【調査B】の両方に協力が得られた16施設（22寮舎）とその職員（247人）を調査対象とした。協力を得られた16施設の施設形態と職員数は、大舎9（132人）、中舎5（63人）、小規模を含む小舎8（47人）、不明（5人）であった。

【調査B】で得られた性的問題に関する職員の意識の5つの下位尺度、「指導方法の悩み」「対人関係との関連」「障がいへの対応」「異性の子どもへの対応」「問題の見えにくさ」の尺度得点を職員の意識得点として用いた。性的問題における職員意識の各下位尺度得点を従属変数に、施設形態（大舎・中舎・小規模を含む小舎の3群）を独立変数として、一要因分散分析を行った（図22）。その結果、「異性の子どもへの対応」の得点について施設形態に差が見られ、多重比較を行ったところ、中舎や小規模を含む小舎の職員の得点の方が、大舎の職員の得点よりも有意に高いことが示された（ $F(2, 239)=3.937, p<.05$ ）。これは、中舎や小規模を含む小舎の方が、職員と子どもとの距離が近く、限られた空間の中で、男女が共同生活を送っているという児童養護施設ならではの困難さを示した結果ではないかと考えられる。



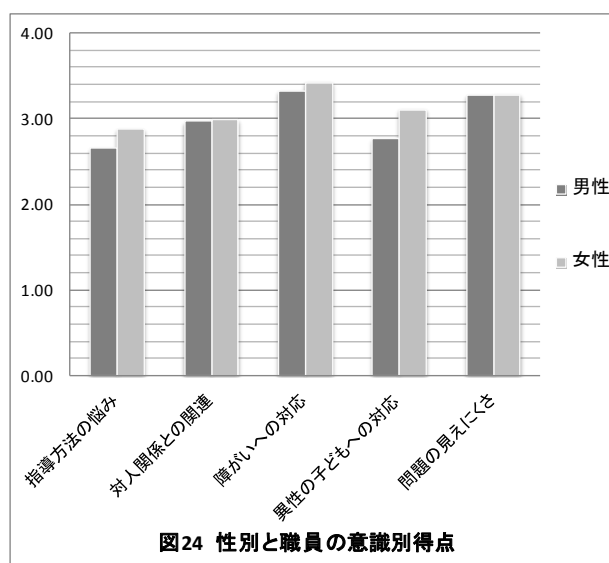
(2) 過去3年間の性的問題の件数と職員意識の関連について

対象となった16施設22寮舎で起きた過去3年間の性的問題は、【調査A】によると15施設17寮舎で78件であった。1寮舎あたり平均3.54件である。性的問題についての職員意識の各下位尺度を従属変数、発生件数3件以下の低群(13施設98人)と4件以上の高群(9施設144人)の2群を独立変数とした t 検定を行った。その結果、児童養護施設では、「指導方法の悩み」($t=-2.601, df=233, p<.05$), 「異性の子どもへの対応」($t=-2.928, df=240, p<.01$), 「問題の見えにくさ」($t=-2.058, df=237, p<.05$)の各得点において2群の差がみられ、高群が低群よりも有意に得点が高いことが示された(図23)。1施設あたりの性的問題発生件数をみると、年に1度は何らかの問題が発生していた計算となり、繰り返し同様の問題が起きていることが推察される。4件以上の性的問題が起きていた施設では、「指導方法の悩み」をはじめ「問題の見えにくさ」において困難さを抱えていることが明らかとなった。近年、児童養護施設における心理職の常勤化が進みつつあり、心理士などの多職種の視点を取り入れ、施設全体で性的問題に複合的な対応が必要であるといえる。

(3) 職員の個人要因と職員意識

1) 性別と職員意識の関連について(図24)

児童養護施設職員の性別の割合は、男性91人、女性153人(不明3人)と、男性より女性が多い傾向にあった。性的問題についての意識の各下位得点を従属変数、性別を独立変数とした t 検定を行った。その結果、「指導方法の悩み」($t=-3.433, df=235, p<.01$), 「異性の子どもへの対応」($t=-3.060, df=242, p<.01$)の得点について性別に差がみられ、女性の方が男性よりも有意に得点が高いことが示された。

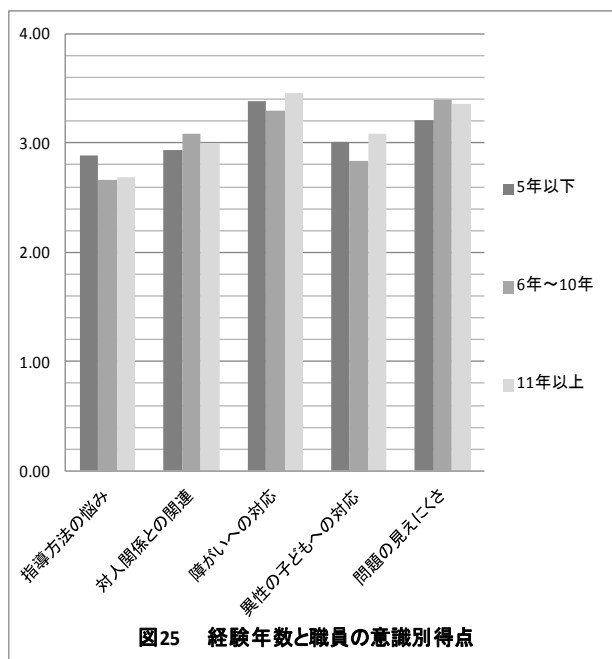


2) 職種と職員意識の関連について

回答を得ることができた職種は、指導員 100 人、保育士 96 人、心理を含むその他 49 人、不明 2 人であった。性的問題についての意識の各下位尺度を従属変数、「指導員」・「保育士」・「FSW や心理士等を含む職種」の 3 群を独立変数とした一要因分散分析を行ったが、有意な差はみられなかった。児童養護施設では、職種による差異はあまりないといえる。

3) 経験年数と職員意識の関連について(図 25)

児童養護施設の施設職員に勤務の経験年数を尋ねたところ、5 年以下は 134 人、6 年～10 年は 57 人、11 年以上は 45 人、不明 11 人であった。性的問題についての意識の各下位尺度を従属変数、「5 年以下」、「6 年～10 年」、「11 年以上」の 3 群を独立変数とした一要因分散分析を行った。その結果、児童養護施設では、「指導方法の悩み」において 5 年以下の経験年数の施設職員が、6 年～10 年と 11 年以上の経験年数がある施設職員よりも有意に得点が高いことが示された($F(2,227)=5.162, p<.01$)。



(4) 考察

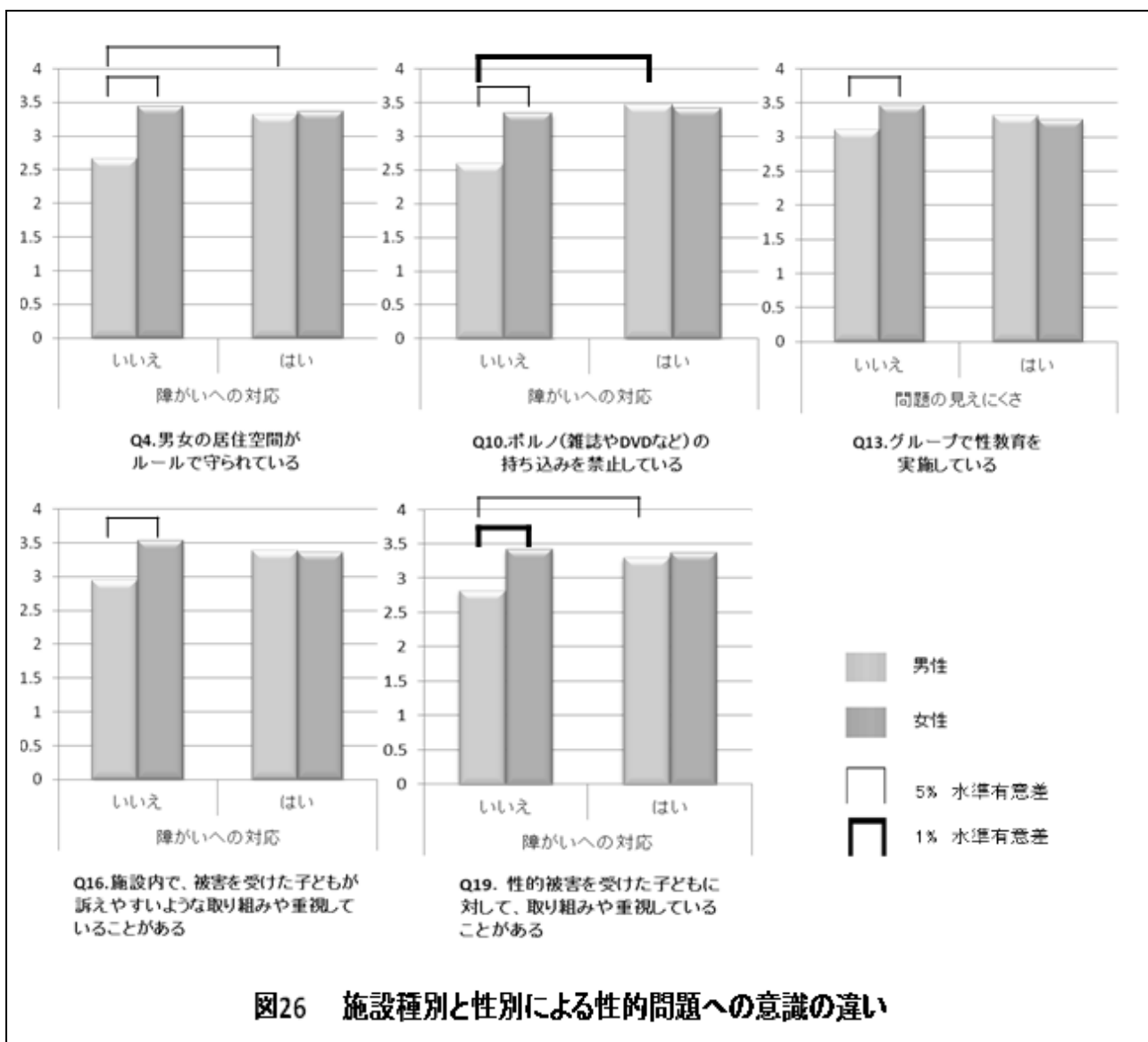
性的問題に関する「指導方法の悩み」や「異性

の子どもへの対応」においては、女性職員の方が男性職員よりも、困難さを感じていることが明らかとなった。また、児童養護施設での経験年数が5年以下の若手職員は、「指導方法の悩み」を抱えていることが明らかとなり、若手の女性職員が、困難さを抱えながら日々現場に取り組んでいる様子が示唆された。施設経験の長い者から指導方法について助言を受けるといったスーパービジョンの取り組み、日ごろの対応を振り返る等のサポートシステムが重要である。若手職員が、バーンアウトしないための対策が必要である。

3-6 施設状況の違いによる児童養護施設職員意識の差異

(1) 施設状況および職員の性別による意識の違い

施設状況の違いによる職員意識の差異を見るために、【調査B】で得られた性的問題についての意識の各下位得点を従属変数に、【調査A】で得られたそれぞれの施設状況(19項目)に当てはまるか否か(「どちらでもない」を除く「はい」「いいえ」の2群)と、職員の性別(男性、女性)を独立変数とした二要因分散分析を行った。その結果、施設状況19項目中5項目に交互作用がみられた。Q4「男女の居住空間がルールで守られている」、Q10「ポルノ(雑誌やDVD)などの持ち込みを禁止している」、Q16「施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることがある」、Q19「性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることがある」において「いいえ」と回答した施設では「障がいへの対応」、Q13「グループで性教育を実施している」において「いいえ」と回答した施設では「問題の見えにくさ」の得点について、いずれも女性の方が男性よりも有意に高いことが示された。つまり、障害への対応の難しさや問題の見えにくさを感じているということである。交互作用の見られたもののみを図26に示す。



職員の意識への施設状況の主効果がみられたものは、施設状況 19 項目中 10 項目(Q1, Q2, Q4, Q9, Q10, Q11, Q13, Q14, Q16, Q19)であった。

「指導方法の悩み」において、Q2「個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている」と、Q13「グループで性教育を実施している」では、性的問題への対応を行っていない施設の職員の方が、対応を行っている施設の職員よりも得点が有意に高かった。しかし、Q11「施設内の男女交際を禁止している」では、対応を行っている施設の職員の方が、対応を行っていない施設よりも得点が有意に高かった。

「対人関係との関連」において、Q1「個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている」では、対応を行っていない施設の職員の方が、対応を行っている施設の職員よりも得点が有意に高かった。

「障がいへの対応」において、Q10「ポルノ(雑誌やDVDなど)の持ち込みを禁止している」では、対応を行っている施設の職員の方が、対応を行っていない施設の職員よりも得点が有意に高かった。

「異性の子どもへの対応」において、施設状況 19 項目中 5 項目、Q4「男女の居住空間がルールで守られている」、Q10「ポルノ(雑誌やDVDなど)

の持ち込みを禁止している」、Q14「個別で性教育を実施している」、Q16「施設内で、被害を受けた子どもが訴えやすいような取り組みや重視していることがある」、Q19「性的被害を受けた子どもに対して、取り組みや重視していることがある」では、対応を行っている施設の職員の方が、対応を行っていない施設の職員よりも有意に得点が高かった。その一方で、Q9「職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない」では、対応を行っていない施設の職員の方が、対応を行っている施設の職員よりも有意に得点が高かった。つまり、職員間でルールが共有されていない方が、「異性の子どもへの対応」に問題が多いと感じているということである。

職員の意識への性別の主効果がみられたのは、施設状況 19 項目中 14 項目、「指導方法の悩み」と Q1, Q2, Q3, Q6, Q8, Q11, Q13, Q14, Q15, Q16, Q17, Q18, Q19 であった。「障がいへの対応」と Q4, Q19。「異性の子どもへの対応」と Q1, Q2, Q3, Q4, Q6, Q13, Q14, Q15, Q16, Q17, Q18, Q19 にみられた。有意差がみられた全ての項目において、女性の方が男性よりも得点が高かった。

(2) 考察

性的問題への対応について、基本的には男女共に高い意識を持っているが、より女性職員が男性職員に比べて高い意識を持って取り組んでいる対応があることが明らかとなった。また Q2「個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている」、Q9「職員間でルールが共有され、大きくズレて混乱することはない」、Q13「グループで性教育を実施している」のように、施設全体での一致した取り組みをすることによって「指導方法の悩み」や「異性の子どもへの対応」における感じ方を軽減できることが明らかとなった。

さらに、生活環境に関わる質問項目、Q1「個人のスペースや所有物が他人から侵されず、守られている」、Q2「個人のスペースと共有スペースの使い分けに配慮した指導をしている」、Q4「男女の居住空間がルールで守られている」Q11「施設内の男女交際を禁止している」においても、「対人関係との関連」や「異性の子どもへの対応」を含めた視点で捉え、対応に臨んでいることが明らかとなった。施設職員は、高い意識を持って性的問題に取り組んでいるものの、今回の結果では、男性・女性職員間で話し合うことに対する抵抗感があることも示された。男性の場合、「障がいへの対応」では、施設全体で取り組んでいる方が高い意識を持っていることが示されており、男性・女性が共通理解を持って対応することが望ましいといえる。性的な問題は、性別による意識の違いをうまく活かし、児童への指導や対応につなげていく必要があるといえるだろう。

3-7 自由記述からみる職員の意識

(1) 自由記述の回答数

調査協力を得られた X 県内の児童養護施設(16 施設、全国の情緒障害児短期治療施設 28 施設で勤める施設職員 738 人(養護施設 ; 247 人、情短 ; 471 人)の内、性的問題に関する自由記述に回答を寄せたのは 126 名で、記述の総件数は 173 件であった。その記述内容を分析し、以下の 7 つのカテゴリーに分類した。

(2) 自由記述のカテゴリー

自由記述の内容から抽出した 7 つのカテゴリー(①発達・障害の問題②性教育・性指導③ケア・治療について④職員の意識⑤性問題の線引き⑥保護者への対応⑦その他)を以下に示す。

1) 発達・障害の問題 (8 件, 4.6%)

「PDD の子の性的問題をはらんだフェティシ

ズムの治療や性被害の治療に困難を感じる」「知的に低い場合どう教えていいか、どこまで理解できているのかが分かり難い」等の記述がみられた。

2) 性教育・性指導 (70 件, 40.5%)

「性に関して統一した指導方法が分からない。子どもも大人もわかりやすい指導方法があればいいと思う。」「性とは男性・女性などの性別の性だけでなく、生きる＝性としての意味もあり、性教育の奥深さ、難しさを感じる。」「性虐を受けてきた子への性指導は、上手にしないとその子を全否定しかねないので悩みます。」等の記述がみられた。

3) ケア・治療について (8 件, 4.6%)

「性的な問題を抱えた児童の治療は、病院も受け入れを拒否されたこともあり、児童福祉のハートで対応するには非常に無理があると感じる。」

「性問題を抱える子どもへのケア・フォローが施設任せで、体系だった知識や理論をはっきりと持っていない」等の記述がみられた。

4) 職員の意識 (28 件, 16.2%)

「職員間での意識にずれがある。」「性的問題は男性の視点と女性の視点がちがっていて難しい」といった職員間の意識差についての記述が見られた。そして「措置変更という解決策しかなくなっていくのは、職員も苦しく、子どもの人生を考えても傷つきになると思う」等の記述がみられた。

5) 性問題の線引き (19 件, 11.0%)

「どこからがスキンシップでどこからが性問題か区別がつきにくい」「異性間はもちろんですが、同性間の性的問題の方が発覚しにくく、指導への難しさを感じます」「性的問題は様々な要因があるため、発見しづらく対応が遅れてしまう」等の記述がみられた。

6) 保護者への対応 (4 件, 2.3%)

「(発覚後いつ伝えるか、どこまで伝えるか等)

保護者対応をどうすればいいか困る」「保護者にも性教育の必要性を感じるが、実際問題、成長した大人相手への指導は難しいと思う。施設が介入すべきかわからない」等の記述がみられた。

7) その他 (26 件, 15.0%)

回答するにあたり「小さな児童(幼児)の施設のため当てはめて考えにくい」「当施設で性的問題はなく、書きづらい。一般としてとらえ回答しました」等の記述が複数みられた。

(3) 考察

分析結果より、児童福祉施設で起こる性的問題の背景には、発達の問題、性教育の困難さ、治療やケアの問題、職員の意識、保護者の問題等が複雑に絡み合っているのではないかとする職員意識が明らかとなった。性的問題が起きていない施設は少ないものの、実際のところ想像しにくいとの回答も寄せられている。しかし、同性同士の性的問題も報告されており、職員の想像の域を超えた問題が起きているのが現実であるといえるだろう。

身体接触のどこからが甘えで、どこからが性的な接触なのか分かり難いという意見は、子どもの様子を見守る職員だからこそ悩まされる視点である。その意味でも、職員間で指導方法を統一し、施設全体で取り組む必要がある。再発予防やケアのために性教育プログラム等への関心も寄せられたが、どのようなものを行って良いのかわからないという意見が多くみられた。

職員の自由記述からは、現場で対応に苦慮する切実な様子が示されている。これらの課題に対応していく必要性があらためて明らかになったといえる。

3-8 聞き取り調査(1)

- 性的問題の実態について -

（１） 調査の概要

調査協力者：承諾を得られた X 県内の児童養護施設 3 施設(以下、A 施設、B 施設、C 施設)の職員 5 名を対象とした。表 10 に施設概要を示す。

表10 協力施設の概要

協力施設	施設の形態
A施設	大舎1、地域小規模施設2
B施設	中舎3、小舎1、地域小規模施設1
C施設	中舎3、小規模施設2

調査時期：2012 年 10 月～11 月

調査方法：事前に調査協力の同意を得られた施設へ調査者が訪問した。協力者には、最初にフェイスシート（性別、年齢層、役職、職種、経験年数、施設形態）の記入を依頼した。聞き取り調査の会話を IC レコーダーに録音することを説明し、同意を得て録音した。施設内での性的問題の実態、性的問題における施設の体制について半構造化面接を行った。最後に施設職員に感想を尋ね、自由に語っていただいた。

分析方法；IC レコーダーに録音した内容から逐語録を作成した。

（２） 性的問題の実態

1) 性的問題の件数と概要

協力を得られた 3 施設での過去 3 年間の性的問題の発生件数は 29 件であった。内容は性行為 1 件、性的接触 11 件、性的非接触 6 件、性的刺激 1 件、その他 10 件であった。

このうち、性的接触には、幼児から高校生までの幅広い年代の子どもが関わっており、同性（男子）間で性器を触り合う・舐め合う等といった問題が大多数を占めた。杉山ら（2008）は、このような同性間による問題を、「施設型性的虐待」と呼び、一般的な性的虐待と区別して、施設特有のタイプとしている。本調査結果は、この施設型性的

虐待が、現状の児童養護施設で起きていることが、まさに追認されたといえる。

事案の内容を確認していくと、複数の問題に係っている子どもが数名あった。これは問題を起こして、いったん指導によって収まったものが、しばらく期間を置いて再度問題を起こしているというものや、最初は被害側であったものが、次には加害側に回っているというものもあった。

このように被害と加害が逆転したり、問題が繰り返されたりするという悪循環が起こりやすいという施設内の課題も示された。

2) 発覚の経緯

性的問題が生じた後、帰省時などに子ども本人が親に話したものが 1 件、子ども本人が職員に話したものが 2 件、周辺からの情報で職員が聞き取りを行ったところ発覚したものが 5 件、職員が現場をみたり証拠を見つけたりしたことで発覚したものが 10 件、加害児本人の自己申告が 4 件、職員及び関係者からの報告で発覚したものが 3 件、別の事件の関係で聞き取り調査を行ったところ発覚したものが 4 件であった。

施設では普段から、何かあったら相談して良いということを子どもたちに伝えていると思われるが、それでも、被害を受けた子どもが自発的に相談してくることは非常に少ない（親・職員合わせて 3 件、10.3%）といえる。子どもの発達段階によっては、被害にあったこと自体の意識が乏しい場合もあるかもしれない。また、被害にあった行為の意味がよく分かっていないこともあると考えられる。むしろ、職員が子どもの様子がおかしいと感じて気をつけてみていた結果、現場をおさえたり、証拠を発見したりするなどして発覚したもののほうが多い。日ごろから子どもをきちんと見ていることが早期の発見につながるといえる。また、何かおかしいと思ったら、聞き取り調査を行うことも、早期発見に有効ではないかと考えられる。

3) 対応

施設内での初期対応（指導）は 29 件すべてで行われていた。児童相談所に連絡し、一時保護となったものは 6 件、その後、措置変更になったものは 1 件のみであった。これは複数の性的問題を繰り返したケースであった。家庭引取り等は 3 件であったが、問題と関係なくたまたま引取りの時期にあたっていたというものもあった。また施設内指導と並行して、児童相談所の児童福祉司の面接指導などが継続しているものもあった。医療との連携では、被害児の産婦人科受診や心療内科でのケアを行う場合があった。発達障害がベースにあると考えられる場合には、小児科または児童精神科受診が行われていた。

施設内指導の内容としては、口頭による注意・指導、生活の制限（必要以外の外出禁止や他児の部屋に入らない等）、反省文や日誌の記入等に加えて、被害児・加害児とも施設内の臨床心理士によるセラピーが並行して行われているケースもあった。

4) 課題

問題の発覚から初期対応、その後の対応にいたるまで、個別性の高い配慮が必要であるが、現実的には対応に苦慮することが多いということが示された。

児童相談所との連携では、一時保護所がいっぱいで問題が起きた時にタイムリーに保護をしてももらえない、複数の子どもが関わっている場合、複数の地域の児童相談所と連絡を取るようになるが、児童相談所あるいは児童福祉司によって対応が異なることにより連携が難しい場合があること等も挙げられている。

また、施設内指導のあり方についても、子どもによって配慮すべき点が異なるため、試行錯誤されているようである。いったん収まったとしても、その後、問題を繰り返されると、職員も無力感に

陥ることが言及されている。さらに保護者への連絡の仕方等についても苦慮している現状が語られた。このように多くの課題を抱えながら、職員は日々子どもと接していることが明らかとなった。

3-9 聞き取り調査（2）

- 施設の体制について -

（1）性的問題対応のマニュアル導入時期と職員意識との関連

本項では、聞き取り調査のうち、施設体制についてのまとめを述べる。

児童養護施設における性的問題への対応について、3 施設とも独自のマニュアルを導入し、施設全体で取り組まれていることが明らかとなった。ただし、性的問題に特化したものではなく、暴力等も含めた種々の問題が起きた際の対応マニュアルという施設もあった。また、導入時期が最も早い施設でも調査時より 2 年前であり、ごく最近、導入されたことも明らかとなった。マニュアルに従うことについて、職員からは「施設全体としてのマニュアルはあるが地域小規模施設独自のマニュアルがない」「マニュアルが浸透しきっていない」「報告体制はあるが、職員の意識をもっと高めたい」等の意見が聞かれた。

（2）性的問題における対応と職員意識との関連

児童養護施設での性的問題における対応では、「早期発見のため、常に子どもたちの行為や様子を目を光らせる」「性を含む暴力は絶対に許されないことを徹底している」「子どもたちが安心・安全に暮らすことができる環境作りは職員に課せられた使命」等、施設職員は高い意識を持って子どもたちを養護している様子が語られた。

その一方で、「（地域小規模施設では）構造的に使いにくく、対応が困難である」「職員間で意識に差がある」「性的問題について職員が意識している

ことを子どもたちに示したい」等、各施設で抱えている問題も明らかとなった。

（３）具体的な性的問題への取り組み

A 施設では「家具の配置替え、ミラーの設置」といった物理的に死角を作らない取り組み、そして「時間的な死角をなくすための巡回時間を増やす」といった時間的な死角を作らない取り組みがなされていた。

B 施設では「１カ月に１回、幼児・小学生・中学生と、年代ごとにプライベートゾーンなどの性教育を行っている」「お風呂は男女で時間帯を分け、大きい子は一人での入浴」等を行っていた。また、C 施設においても「幼児のうちから、性やプライベートゾーンなどに関する絵本の読み聞かせをする」「特に大きい子は、お風呂はなるべく一人ずつ入るようにする」「男子だけ集まってもらい男子の性指導を行っている」等、幼い頃から性教育に関する取り組みを行っていることが明らかとなった。

（４）職員研修の状況

職員研修の回数が多く聞かれた B 施設では、「毎月全体ケース会議を行い処遇力の向上を図っている」ことが報告された。特に、B 施設と C 施設では、性にまつわる施設内研修を意識して行っており、産婦人科医や助産師を講師に招いての研修会や、子ども向けに第２次性徴や子宮頸がん等について知るための学習会を行っていた。施設外研修では、A 施設は定期的に施設へ届く研修案内から、職員が各自判断し、年数回、参加しているといったことが挙げられた。

（５）現状の課題

各施設から「職員が意識を高めていくことが大切」「職員のスキルアップと連携の強化」等、職員の対応の質を向上させることが課題であるという

意見が多く聞かれた。しかし、少数意見ではあるが、次のような課題が寄せられた。A 施設の地域小規模施設職員からは、「一般の一軒家をそのまま利用しているため、リビングや居間以外にも、脱衣所やトイレ等の男女共有スペースが多く対応に悩むことがある」といったことが挙げられた。

性教育プログラムを実施していた B 施設は、施設独自のプログラムを導入したばかりのため、「性教育プログラムの見直しと実施を行い、より良いプログラムの構築を目指している」といった意見も聞かれた。

C 施設では、「児童相談所との連携でも、ケースワーカーによって温度差があるため、施設だけではなく児童相談所も一緒に体制を組めると良いのだが」といった、児童相談所との連携を課題として挙げられた。

（６）考察

X 県内の３つの児童養護施設では、性的問題に対応するためのマニュアルや性教育プログラムの導入、性に関する職員向けの研修や児童向けの学習会等が実施されていた。マニュアル導入時期によると、ここ数年の間に性的問題への意識が高まり、体系化の流れができつつあるといえるだろう。この背景には、各施設で性的問題が繰り返されたという苦い経験から、再発予防に向けての動きが高まったように思われる。性的問題への対応には、医療や児童相談所などとの連携が必要なケースもあり、施設職員、児童が孤立するといった最悪の状況を防ぐような関係を、日常の中から築いておく必要がある。近年の流れでは、地域の中で児童の成長を見守り育てていくことを目的とし、地域小規模施設化が進みつつある。しかし、今回の調査で明らかとなったように、複数人の男女が安心・安全に共同生活をおくるためには、物理的・空間的死角を減らすための設備配置、浴室・脱衣

所・トイレを性別ごとに設けること、個別に使用できる等の配慮が必要である。さらに、時間の死角を減らすための人員配置も必要となってくるであろう。

4 総合考察

4-1 性的問題の実態のまとめ

本研究では、児童養護施設における性的問題の件数、内容、対応など、これまで明るみに出てこなかった部分が具体的な数字として示され、一部の地域の施設ではあるものの実態が示されたといえる。施設全体の約9割に性的問題が起きていることが明らかとなり、一部の施設の問題ではなく、むしろどの施設でも起こりうる問題であることが実証的に示されたといえる。

性的問題の内容は、性的接触をはじめ多岐に渡り、異性間の問題だけでなく、同性間（特に男子同士）によるものも挙げられた。また重複して問題を起こす子どもや、過去に性的被害を受けた子どもが加害に転じた例もあり、子どもが加害・被害両方の立場に成りうるということが明らかとなった。海野ら(2007)が、「弱者は加害者からの脅しにより秘密を守り、施設から加害者が退寮するまで長い間虐待に耐え、自己を蝕んでいく。そして、今度は年少児童に虐待の再現行為としての加害を行うといった連鎖が生じる」と述べるように、施設における性的問題は、年長児から年少児に施設内で連鎖していく重篤な課題であることが、本調査結果からも示されたといえる。

また、20.8%の子どもに、性的虐待（疑い含む）の経験があり、性的問題の背景に、性的虐待を受けた子どもが入所後に施設内で性的虐待の再現化を行っている可能性も示唆された。性的虐待を受けた子どもは、無意識のうちに性的な挑発を他者に向け、性的被害を呼び込んでしまう再被害化傾向や、自分が受けた被害を他者に向ける性的

加害行為が生じやすいとされている（杉山ら、2009；西澤,2011）。滝川ら(2012)の調査によると、「人にベタベタする、会話の際に相手の体に触る」に該当した児童は入所児童全体の26%を占め、中学生でも22.2%と高率な結果が示されている。このような行動は「性的な誘惑行動と誤解されやすく、施設内で性被害を受ける引き金になりやすい」とされる。入所前に限らず、入所後に性的虐待を被っていたことが発覚したり、性的虐待に巻き込まれたりすることもある。そのため、性的虐待を受けたことが明らかな子どものみならず、全入所児童の状態像を適宜アセスメントしていくことが必要である。

さらに滝川ら（2013）は、情緒障害児短期治療施設の性的問題事例の検討から、「過去に性被害体験を持つ子どもは4割弱で、性的問題をおこす子どもは必ずしも過去に性的被害体験があるわけではなく、発達の未熟さゆえに、性的な問題行動が引き出されやすいケースが多い点に十分な理解が必要である」と述べている。また、思春期年齢で性問題がみられる場合についても、「思春期的な性の目覚めというより、幼さゆえの愛着の希求と性的行動とが混在した様相のことが多い」と指摘している。

性的虐待の事実の有無に関わらず、入所している子どもは様々な問題を抱えていることが多くの研究で示されており（坪井,2005；石,2006 など）、刺激への脆弱性や衝動コントロールの弱さなども問題発生に関連していると考えられる。また虐待を受けた子どもたちの中には、他者支配の目的で性的手段が用いられることがある（滝川ら、2013）と指摘されており、その点にも注意する必要があるだろう。

本研究で検討してきたように、性的問題を考える際には、施設の体制、職員の意識の持ち方や職員間の意識のズレ、力による支配関係や暴力の間

題等々についても意識しておくべきであろう。性的問題はどの子にも起こりうることであり意識しながら、子どもとかかわっていくことが必要であるともいえる。性的問題は、子ども同士の間で起きてくることが多いだけに、子ども個人のアセスメントだけでなく、子ども集団のアセスメントをすること、そして、施設全体という組織のリスクマネジメントを行っていく視点も重要であると考えられる。

4-2 今後の課題

本研究の成果として、これまで明るみに出てなかった性的問題の実態が具体的なデータとして示されたこと、さらに職員の意識についても実証的に示されたことに意義があるといえる。さらに聞き取り調査によって問題の発覚から対応の流れを明らかにしたことも意味があるだろう。

物理的・空間的・時間的死角をなくすために施設の構造や人員配置に目を向ける必要性も浮き彫りとなった。施設の体制としても、子どものプライバシーが守られる配慮や環境整備の重要性が示されたといえる。

本研究では十分行えなかった点として、性的虐待を受けた子どもが、性的問題にどの程度関与しているか等、性的虐待との関連をさらに明らかにしていく必要があるだろう。また、性的問題に対する施設内指導の内容をより具体的に確認し、効果的な指導法を検証していくことも必要である。そのために、改善が見られた事例を中心に、施設職員にインタビュー調査を行い、改善につながる方法を導きだしていきたいと考える。

石澤ら(2011)が、性教育プログラムの確立と性的問題に対する職員の対応マニュアル作成に向けた試みを行っているように、児童養護施設における対応マニュアルは各地で導入され始めている。しかし単にマニュアルを作成するのみならず、内

容の充実はもちろんのこと、いかに活用していくのか、いかに実効性のあるものにしていくのが大事である。性的問題に対して、施設が、児童相談所や医療機関、教育機関等とどのような連携を図っていくのが良いのか、あるいは保護者との関係についてもどのように対応していくことが望ましいのかを検討し、明らかにしていくことが今後の課題である。

予防的対応として、施設状況に合わせた心理教育プログラムの開発も必要であると考えられる。その際、性的問題の背景にある子どもたちの対人関係を把握していくこと、生い立ちや愛着の問題を適切にアセスメントし、対応していくことが重要な課題となるであろう。

本研究をベースとして、今後も施設における子どもたちへのより良い対応について、さらなる研究に発展させていきたいと考えている。

謝辞

本研究にご協力くださいました児童養護施設および情緒障害児短期治療施設の施設長はじめ職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

また助成により本研究を遂行する機会を与えてくださいました公益財団法人日工組社会安全財団に心より御礼申し上げます。

文献

- 相澤林太郎 (2011) 子どもの性的問題と予防的支援—児童自立支援施設での取り組み(特集 生と性) -- (児童福祉における性教育と生命(いのち)の教育), 世界の児童と母性, **71**, 53-60.
- 藤澤陽子・西澤哲 (2006) 性的虐待を受けた子どもの性化行動に関する研究 --Child Sexual Behavior Inventory (CSBI) を用いた評価の試み, 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, **42**, 156-165.

石澤方英（2011）児童福祉施設における性教育の現状と課題—性的問題の視点をとおして、そだちと臨床,**10**,147-150.

石澤方英・小木曾宏・徳地昭男・杉浦ひとみ・伊藤貴啓・相澤林太郎・柳原由以（2011）児童福祉施設における性教育プログラム確立と性的問題に対する職員の対応マニュアル作成に向けた実態調査：加害者にも被害者にもならないための予防策としての性教育実践のために，明治安田こころの健康財団研究助成論文,**47**,135－143.

河野美江（2010）児童福祉施設等における性の問題と性教育の実践，島根大学社会福祉論集,**3**, 45-53.

西澤哲（2011）性的虐待が子どもに及ぼす心理的影響とそのアセスメント(特集 性的虐待)，子どもの虐待とネグレクト,**13(2)**, 179-190.

榊原文・藤原映久（2010）児童養護施設入所児童の性問題行動について—児童養護施設職員へのフォーカス・グループ・インタビューを通じて，子どもの虐待とネグレクト,**12(3)**,386-397.

石 曉玲（2006）児童養護施設における子どもの情緒的・行動的問題アセスメント：被虐待児を中心とした治療的対応を巡って，臨床教育心理学研究,**32(1)**,1-8.

杉山登志郎・海野千畝子（2009）児童養護施設における施設内性的被害加害の現状と課題(特集 社会的養護における不適切な教育)，子どもの虐待とネグレクト,**11(2)**,172-181.

杉山登志郎・海野千畝子・藤澤陽子他（2008）性的虐待のケアと介入に関する研究「児童養護施設における性虐待対応マニュアル」の作成，厚生科学研究「児童虐待等の子どもの被害及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究」（主任研究者奥山眞紀子）H17-19年度包括報告書.

滝川一廣・平田美音・玉井邦夫・坂口繁治・平岡

篤武・増沢高・奥山志麻・大塚斉・相澤林太郎・堀健一（2012）.情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究(第1報)，子どもの虹情報研修センター平成21・22年度研究報告書.

滝川一廣・平田美音・玉井邦夫・坂口繁治・塩見守・平岡篤武・増沢高・奥山志麻・中島喜伸・福井伸弥・堀健一・大嶋隆志・大塚斉・相澤林太郎（2013）.情緒障害児短期治療施設における性的問題への対応に関する研究(第2報)，子どもの虹情報研修センター平成23年度研究報告書.

徳山美知代・森田展彰（2007）児童養護施設における治療的養育の手段としてのグループアプローチ，子ども虐待とネグレクト,**9(3)**, 362-372.

坪井裕子（2005）Child Behavior Checklist/4-18 (CBCL) による被虐待児の行動と情緒の特徴：児童養護施設における調査の検討，教育心理学研究,**53(1)**,110-121.

海野千畝子・杉山登志郎（2007）性的虐待の治療に関する研究 その2：児童養護施設の施設内性的虐待への対応，小児の精神と神経，**47(4)**, 273-279.

山口修平（2011）児童養護施設の性教育の実際—職員組織作りと児童に伝わる実践(特集 生と性) - (児童福祉における性教育と生命(いのち)の教育)，世界の児童と母性，**71**, 46－52.

【付録】

<学会発表一覧>

1. 坪井裕子・三後美紀・柴田一匡・米澤由実子：
児童養護施設における性的問題(1)-調査の概要-，
日本子どもの虐待防止学会第18回学術集会(平成24年12月8日；高知県立大学)
2. 柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子：
児童養護施設における性的問題(2)-性的問題の実態-，日本子どもの虐待防止学会第18回学術集会(平成24年12月8日；高知県立大学)
3. 三後美紀・坪井裕子・米澤由実子・柴田一匡：
児童福祉施設における性的問題に関する研究
(1) -児童養護施設職員と情緒障害児短期治療施設職員の子どもの性的問題への意識-，日本発達心理学会第24回大会(平成25年3月17日；明治学院大学)
4. 米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡：
児童福祉施設における性的問題に関する研究
(2) -児童養護施設の施設状況と職員意識の関連について-，日本発達心理学会第24回大会(平成25年3月17日；明治学院大学)
5. Hiroko Tsuboi・Miki Sango・Kazumasa Shibata・Yumiko Yonezawa：Sexual problems in children's homes in Japan，欧州児童青年期精神医学会(平成25年7月9日；アイルランド・ダブリン)
6. 三後美紀・坪井裕子・米澤由実子・柴田一匡：
子どもの性的問題に関する児童福祉施設職員の意識 - 児童養護施設職員と情緒障害児短期治療施設職員の意識の比較から -，日本教育心理学会第55回総会(平成25年8月19日；法政大学)
7. 三後美紀・坪井裕子・米澤由実子・柴田一匡：
児童福祉施設における性的問題(1) - 子どもの年代別にみた職員の性的問題への意識 -，日本心理臨床学会第32回秋季大会(平成25年8月26日；パシフィコ横浜)
8. 米澤由実子・坪井裕子・三後美紀・柴田一匡：

児童福祉施設における性的問題(2) - 児童養護施設の施設状況と職員意識の関連について -，日本心理臨床学会第32回秋季大会(平成25年8月26日；パシフィコ横浜)

9. 坪井裕子・三後美紀・米澤由実子・柴田一匡：
児童福祉施設における性的問題に関する職員の意識について - 情緒障害児短期治療施設の職種による検討 -，日本学校心理学会第15回三重大会(平成25年9月15日；皇學館大学)

<今後の発表予定>

10. 柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子：
児童養護施設における性的問題について(3) - 実態調査における特記事項の検討 -，日本子どもの虐待防止学会第19回学術会議(平成25年12月14日；信州大学松本キャンパス予定)
11. 柴田一匡・坪井裕子・三後美紀・米澤由実子：
児童養護施設における心理教育プログラムの取り組み - 職員の意識について -，日本発達心理学会第25回大会(平成26年3月，京都大学予定)